「垂毛亦比肩」考

――『懐風藻』下毛野虫麻呂「秋日於長王宅宴新羅客詩」と祥瑞――

土佐朋子

一、「垂毛亦比肩」の問題
二、「垂毛」は髪型か
三、「垂毛」の異形性と瑞祥性
四、「飛鸞曲」――歌う瑞鳥「鸞」――
五、「比肩」――王者の徳、幽隠・鰥寡に及べば則ち至る――
六、「垂毛」で「比肩」の「梯山客」
七、新羅と「馬」
八、おわりに

『懐風藻』所収の下毛野虫麻呂「秋日於長王宅宴新羅客詩」の第三・四句「況乃梯山客　垂毛亦比肩」は、新羅使が瑞獣を伴って来朝したことを表している。「垂毛」は竜馬の肢体を、「比肩」は比肩獣をそれぞれ指している。竜馬も比肩獣も『芸文類聚』瑞祥部に記され瑞獣であり、『延喜式』にも大瑞として掲げられる。瑞祥の知識を持っていた下毛野虫麻呂は、新羅使送別宴での創作にあたり、日本に一千年に一度と言われる七百年続く聖代が出現した奇跡に呼応して、新羅使によって瑞獣がもたらされる奇跡が起こったと観念することによって、天皇と新羅使の双方を讃美することを意図したと考えられる。

一、「垂毛亦比肩」の問題

『懐風藻』には、長屋王宅における新羅使の送別宴での詩が十篇収録されている。次に掲げる詩は、その中の下毛野虫麻呂の一篇である（この詩には序が付されているが、ひとまずここでは措くことにする）。

□時逢七百　祚運啓一千　況乃梯山客　垂毛亦比肩
寒蟬鳴葉後　朔雁度雲前　独有飛鸞曲　並入別離絃[1]

本稿で問題にしたいのは、第四句の「垂毛亦比肩」である。まずは、この句に対するこれまでの注釈書の解釈を見てみよう。

今井舎人『懐風藻箋註』（元治二年、以下『箋註』）は、「山海経有二比肩獣一」と注する。この『箋註』の指摘は、その後、澤田總清『懐風藻註釈』（大岡山出版、昭和八年、以下『澤田註釈』）の注「山海経『比肩獣』」にわずかに引き継がれているが、他の注釈書では顧みられていない。釈清譚『懐風藻新釈』（丙午出版社、昭和二年、以下『新釈』）は、「垂毛、我も彼も頭髪の容同じきを曰ふ」と注する。『澤田註釈』も、『箋註』に「比肩獣」があることを記すも特にそれを踏まえることはなく、「比肩獣」は「同様」の意味だと注し、「新羅の客は、やはり、頭髪はまた我と同じである」と訳す。世良亮一『懐風藻詳釈』（昭和十三年、以下『世良詳釈』）もまた、「親しくここに毛髪を垂れ肩を並べてゐる」と訳す。これら三本の注釈書は、日本側と新羅側の参加者が皆同じ髪型であることを言う句として捉えている。

それに対して杉本行夫『懐風藻』（弘文堂書房、昭和十八年、以下『杉本注』）は、新羅使の「長髪（垂毛）」が「肩まで垂れてゐる」様子を表すとしており、新羅使の髪型を言う句として解している。逆に林古渓『懐風藻新註』（明治書院、昭和三十三年）は「垂毛」を「垂髪で小児の事か、自らを卑下するか」として、日本の官人の髪型を謙遜して表したものだと捉え、「小児の如き」日本の列席者が新羅使と「同列になつて、悦びあつてをるといふ意でもあるか」と述べている。

小島憲之『日本古典文学大系69 懐風藻 文華秀麗集 本朝文粋』（岩波書店、昭和三十九年、以下『小島大系』）は、「垂毛」を新羅使の髪型ととり、「白髪頭を垂らして、この席に肩を並べているのだ（その中には垂白の老人もいる）」と訳しているが、「垂毛以下難解」とも注しており、さらに補注で「初唐楊炯の庭菊賦『及レ暮二年華一、髪垂レ肩』の例によれば、新羅の使者が来朝して以来月日も立ったという意にもとれるが、適確なことは未詳。或は、今はめでたい聖代に当っている、まして毛髪を垂らした新

羅の使者は我々と肩を並べて、この聖代を祝う酒宴の席に侍っているといった意か、後考をまつ」と述べる。[2] 辰巳正明『懐風藻全注釈』（増訂版・花鳥社、令和三年、以下『辰巳全注釈』）は、「垂毛」は「髪を垂らして。異国人の容姿か」とし、「比肩」については「仲間として肩を並べる。註釈は『山海経』の『比肩獣』をあげるが、これは瑞応図によると『比肩獣者。王者徳及幽藪鰥寡得所則至』というようにあり、外国使を迎える用語としては相応しくない。『文選』任彦升『為范尚書讓吏部封侯第一表』に『抜十得五尚曰比肩』とある比肩の意味である」と注して、「垂毛亦比肩」を「天皇の前に白髪を垂らして肩を並べている」新羅使の姿だと解している。

これらを見ると、「垂毛亦比肩」の「垂毛」については、新羅使のものととる（杉本注、小島大系、辰巳全注釈）のか、日本の官僚のもの（林新註）ととるのか、はたまた両方のもの（新釈、澤田註釈、世良詳釈）ととるのかに違いはあるが、人間の頭髪と解する点では一致している。そして「比肩」については、「垂毛」が肩まで伸びた状態だととる『杉本注』を除いて、新羅使が日本の官人と「肩を比べ」て宴会に参加している状態を表すものとして解している。つまり、これまでの注釈書によれば「垂毛亦比肩」は、頭髪が長くなって垂れたり白くなったりした新羅使たちが、日本の官人と並んで宴会に列席する様子、あるいは日本の官人も同様に髪を垂らし、みんなで同じ髪型をして宴席に居並ぶ様子を描いているということになる。

しかし、皇族の一員で、かつ政府の要人でもある長屋王主催の送別宴に招かれた外国使節が、頭髪をあげもせず、垂らしたままで参加したりするものだろうか。応接する側も、ざんばら髪で外国使節を接待するなどということが本当にあるのだろうか。『世良詳釈』は、両国の参加者の親しさの表われだとする。しかし、男性官僚が髪の毛をほどいて垂らすことが、儀礼の場における親密さの表明として国際的に共有されるものなのだろうか。和書と漢籍とを問わず、髪の毛を垂らすことや同じ髪型をして居並んでいることが、列席者の親密さを表現したという例は管見にして知らない。

また『小島大系』が言うように、新羅使の中に白髪の老人が混じっていたのだとしても、あるいは来日からの時間が経過し、髪の毛が多少伸びていたのだとしても、そのような姿をわざわざ宴席詩に詠み込むことにどのような意味があるというのだろうか。そしてそれが、「聖代」を祝うことにつながるという理路も今一つ分からない。

いずれの注釈書も、「垂毛」すなわち「垂髪」と解して疑わない。しかし、「毛」が直ちに「人間の頭髪」を意味

し得る語だとは限らない。確かに「毛」は「髪」と合体して「毛髪」の語を構成し、人間の髪の毛を意味することもあるが、「毛」だけが単独で用いられた時には、「髪」よりも「体毛」という意味になるのが普通である。とはいえ「体毛」を「垂」らした人間など通常は見かけないから、獣のことか異形の人ということになる。

「垂毛」と並列される「比肩」には、『箋註』が「比肩獣」を指摘していた。後の注釈書に顧みられることはなく、『辰巳全注釈』では、外国使節応接の場には不適切だと完全に否定されている。これも空想世界の珍奇な「獣」が宴席詩に読まれるはずがないという思い込みが働いているのだろう。宴席詩に対する従来の常識によって、「垂毛」は人間の髪型だとされ、「比肩」は「比肩獣」との関わりが顧みられなかった。しかし、逆に言えば、宴席詩だから「獣」など詠まれるはずがないという思い込みを取り払えば、「垂毛」はまずは「獣」を連想させる語であり、「比肩」がそのような語と並列されていることは無視されるべきではないだろう。さらに言えば、下毛野虫麻呂詩では末句「独有飛鸞曲」にも「鸞」という空想世界の動物が用いられている。であるからには、「垂毛亦比肩」が空想世界の獣を指している可能性を閉ざすべきではない。『箋註』の「山海経に比肩獣有り」という指摘は今一度、顧みられてよいのではないだろうか。

本稿では、「垂毛亦比肩」の句を改めて考察し直し、新羅使応接の宴席には似つかわしくないようにも見えかねない「垂毛」や「比肩」という語の意図を明らかにしてみたい。

二、「垂毛」は髪型か

従来、「垂毛」は前節で述べたように、「垂髪」の意味で解されてきた。新羅使と日本側の両方の垂髪（『新釈』『澤田註釈』『世良詳釈』）、日本側の垂髪（『林新註』）、新羅使の垂髪（『杉本注』『小島大系』『辰巳全注釈』）というように、誰の髪型だととるかは注釈書によって相違があるが、宴に参加している人間の髪型だとする点が問題視されることはなかった。

「毛」は、『説文解字』「毛部」に「眉髪之属及獣毛也。象形。凡毛之属皆从毛。莫袍切」とあり、眉や髪に属するものや獣毛が全て「毛」の字義の範疇だとされ、字義としては人か獣のいずれかに限定するものではないことが分かる。『釈名』「釈形態」には、「毛、冒なり。表に在りて、以て形貌を別ち、且つ以て自ら覆冒する所なり」とあり、体表を覆うことを意味するのが「毛」だ説明されている。つまり、「毛」は、獣や人の体表を覆う毛状のもの全般を

指す語であるということになる。

『周礼』「秋官」に「王燕すれば則ち諸侯の毛のままにす」とあり、鄭玄注によれば「須髪を以て坐するを謂ふなり。…鄭司農云く、老は上に在るを謂ふなり。老は二毛なり、故に毛と曰ふ」とされ、宴の席次を決める基準となる鬚や髪が「毛」の語で表されていることが分かる。「毛」の色によって上座と下座が決められた、つまり白髪まじりだと年長者と判断されて上座につかせたということだろう。「二毛」は『礼記』「檀弓下」に「二毛を獲らず」とあり、鄭玄が「鬢髪斑白なり」と注する通り、老人の白髪交じりになった鬢髪を指す。漢籍に一般的に見られる語で、『懐風藻』にも藤原宇合92「悲不遇詩」に「二毛已に富めりと雖も　万巻徒然に貧なり」と用いられ、『万葉集』の山上憶良の漢文序にも、「二毛の嘆きを撥はむ」（⑤八〇四序）と見える。確かに、漢籍のこれらの「毛」は、人間の頭髪を指す語として用いられている。しかし、これらの「毛」は「色」に注目した表現であり、そのことが前後の文脈から読み取れる。それに対して、下毛野虫麻呂詩の「垂毛」は、「垂」という形状を意味する語が「毛」に接続されており、明らかに「形」に注目した表現だという違いがある。

漢籍の「毛」は「獣毛」を指す語でもある。『礼記』「礼運」の「未だ大火有らず、草木の実、鳥獣の肉を食し、其の血を飲み、其の毛を茹ふ」の「毛」は、「鳥獣」の「毛」を指す。同じく『礼記』「楽記」の「毛者孕鬻」に対する孔穎達疏に「走獣の属」、『呂氏春秋』「観表」の「毛羽裸鱗」に対する高誘注に「虎狼の属なり」、『文選』左思「蜀都賦」の「毛群陸離」の李善注に「毛群は獣なり」などの説明に拠れば、「毛」が獣を象徴する語として用いられていることが分かるし、『文選』曹植「七啓」の「野に毛類無く、林に羽群無し」の「毛類」の語で獣を指す例も見られる。これらからは、「毛」は、全身が毛に覆われた獣の野生を、人間と対比的に表す語だと考えられる。

これは、「人」や「民」が接続して「毛人」「毛民」となった場合も変わらない。『淮南子』「墜形訓」にある「毛民、労民」の「毛民」は、高誘が「其の人、体に半ば毛を生じ、矢鏃のごとし」と注するのに拠れば、体表に鋭い毛が生えた人間のことである。『山海経』「海外東経」に「毛民の国、其の北に在り。人為る身に毛を生ず」とあり、それに対して郭璞は『淮南子』「墜形訓」の「毛民」を高誘注と併せて引き、さらに「今、臨海郡を去ること東南二千里にして毛人有り。…人為る短小にして、体に尽く毛有ること豬のごとし」と注している。『山海経』にはもう一カ所「大荒北経」に「毛民の国有り」が見られ、郭璞はここにも「其の人、面体皆毛を生ず」と注している。『芸文類

聚』巻八十二「草部下・茗」所引の『続搜神記』に「毛人」の語が見える。晋孝武帝の時代に、宣城の秦精という人が武昌の山中で茗を摘みに入って「毛人」に出会った。その「毛人」は親切であったが、「身長一丈、体を通して皆毛」が生えていたために、秦精は甚だ恐怖したという。これらの「毛」は獣ではなく、人の形をしたものに生えているが、いずれも頭部に限定されず、全身に生えた「毛」であり、いわゆる「体毛」を意味する。そして、これら「毛」で覆われた「人」や「民」は、人間世界の周縁に位置する異世界に生きており、そのために皇帝の教化に浴さない非文明的な存在としてイメージされている。『宋書』倭国伝に引かれる倭王武の上表文にも、「東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国」とあり、武力で制圧された辺境の蝦夷が「毛人」と表されている。全身を毛で覆われた「毛人」や「毛民」が未開の野蛮な人間を表すのは、その姿態が全身を毛で覆われた獣と重ね合わされるからだろう。

古代日本の史書の「毛」も見てみよう。敏達紀十年閏二月条の蝦夷反乱の記事の注記に「魁帥は大毛人なり」が見られるが、これは漢籍に引かれた倭王武の上表文と同じく蝦夷を指しており、全身を覆う「毛」である。土地の産物を表す「土毛」（応神紀十九年・天武十年八月）や「華実之毛」（天智元年十二月条）といった表現があることから考えても、「毛」はまずは表面を覆うものとして理解されていたのであり、人間の頭部に限定的に生えるものを意味するという理解は薄かったのではないかと思われる。むしろ古代日本においては、「毛の麁、毛の柔」で全ての獣を指す定型表現があることからも、「毛」と言えばまずは獣毛を連想するのが定石だったと考えるのが自然である。景行紀四十年七月十六日条の「毛を衣、血を飲み」は『礼記』「礼運」を典拠として未開の東国人が着る獣毛を表し、雄略紀七年八月条の「毛を抜き翼を剪りて」は雄略に見立てられた雄鶏の毛を言い、欽明即位前紀の「血毛を拭ひ洗ひて」は血にぬれた狼の毛を指している。さらに、天武紀九年二月二十六日条には、「人有りて云はく、『鹿角を葛城山に得たり。其の角、本は二枝にして末合ひて宍有り。宍の上に毛有り。毛の長さ一寸なり。則ち異しびて献る』と。蓋し麟角か」という記事がある。この「毛」は、瑞獣の一つ「麒麟」のものかと疑われる角に生えていた「毛」である。

このように見てくると、古代日本において、「毛」一語で直ちに人間の頭髪を指すと理解されていたとは考えにくい。むしろ「毛」は獣の体表に生えるものだとする理解が一般的であったのであり、故に未開の辺境の野蛮で非文明

なイメージをも付与された語だったのだと考えられる。このような当時の「毛」という語に対する認識に照らし合わせれば、下毛野虫麻呂詩の「垂毛」の「毛」を単純に人間の頭髪と決めつけてしまうことは問題であろう。

三、「垂毛」の異形性と瑞祥性

漢籍に「垂毛」という表現はなかなか見出しにくいが、管見の範囲では、仏典に一例確認することができる。『大毘盧遮那成仏経疏』巻六の「皆露身垂毛作非人之像（皆露身垂毛して非人の像を作す）」（大蔵経三十九巻1796/642b）である。この「垂毛」は、人間の髪型ではなく、人間ばなれした霊妙なるものの姿態を表している。また、『太平広記』「異人一」所引『王子年拾遺記』に、「其人長四尺、両角如璽、牙出於脣、自腰已下有垂毛自蔽、居於深穴、其寿不可測也」（「韓稚」）がある。[3] 戦乱が終熄し、天下泰平が実現した漢恵帝の時代、多くの国が来貢した。これは、その中の一つ、東方扶桑の更に外にある泥離という国からの来朝者の外見を、「身長四尺、璽の如き二つの角、脣から出た牙を持ち、腰から下には垂毛が有って自ずから覆われ、深い穴に居住し、年齢が測り難い」と述べるくだりである。この説話では、時を同じくして、恵帝のもとに来ていた東海神君の使いと名乗る韓稚という道士が、絶域の言葉を解したため、年齢を聞かせたところ、この異様な姿態を持った来朝者「其人」は、「数えられないくらい死んだり生きたりしてきた」と言い、女媧以前、鑽人以前、伏羲黄帝以降のこの世のありようを問われるがままに答えたとされる。この「垂毛」も頭髪ではなく、体毛だと解される。腰から下に「垂毛」を持つ上に、巨大な身長と角と牙が生え、分からなくなるくらい生死を繰り返し、伝説の時代からの世の推移を見ていたかの如く話す「其人」が、普通の人間でないことは明らかである。扶桑の外の非現実的世界の泥離国から来訪した異形の人だと考えるべきであろう。つまり、「垂毛」とは、人間世界の時空を超える存在を表す特徴だと言える。

さらに、「垂毛」の語は、『芸文類聚』の「祥瑞部下・馬」に引かれる『瑞応図』の次の一節に見出される。

竜馬者仁馬、河水之精也。高八尺五寸、長頸、骼上有翼、旁垂毛、鳴声九音。有明王則見。

ここには、明王が立つと現われる祥瑞「竜馬」の容姿の一つとして、「垂毛」が挙げられている。『宋書』「志・符瑞中・神馬」にも「竜馬者仁馬也。河水之精。高八尺五寸、長頸有翼、傍有垂毛、鳴声九哀」というほぼ同一の説明が見られる。[4] 翼が有って、毛を垂らして、九音の鳴き声を持つ馬など、現実世界には存在しない。普通には存在しない

はずの異形の馬がこの世に現れることの奇跡が、普通にはなかなか現れない明王が出現することの偶然性と重ね合わされる。竜馬の異形性を表すのが「垂毛」である。

漢籍において「竜馬」は、いわゆる河図伝説の動物であり、聖王の治世に現われる瑞祥とされる。「河図八卦は伏羲氏天下に王たり、竜馬河より出づ。遂に其の文に則して、以て八卦を画く、之を河図と謂ふ」（『尚書』「顧命」孔安国伝）などに拠り、伏羲の天下に黄河から背に文を負って現われたとされる。「鳳鳥至らず、河より図出でず、吾已んぬるかな」（『論語』子罕篇）という聖王の不在を嘆く孔子の言葉は、図を背負った竜馬が鳳凰と並んで理想の天子の治世に応じて現われる瑞祥だと認識されていたことを窺わせる。

古代日本の律令官人たちにこの祥瑞としての「竜馬」が認識されていたことは、例えば、孝徳紀白雉元年二月十五日条、「白雉」出現にあたっての詔に、「聖王世に出でて天下を治むる時に、天則ち応へて其の祥瑞を示す。曩者、西土の君、周の成王の世と漢の明帝の時とに、白雉爰に見ゆ。我が日本国の誉田天皇の世に、白烏宮に樔ふ。大鷦鷯帝の時に、竜馬西に見ゆ。是を以て、古より今に迄るまでに、瑞祥時に見えて、有徳に応ふること、其の類多し」とあるのに窺うことができる。ここでは、漢土の周成王と漢明帝の白雉、日本の応神朝の白烏と並んで、仁徳朝に現われた「竜馬」が挙げられている。記紀の仁徳天皇条には竜馬出現の記録はないにも拘わらず、日本における「祥瑞」出現の初見にあたるこの孝徳紀の詔で過去の瑞祥例として「竜馬」が挙げられることからは、特に「竜馬」に対して瑞祥の象徴性を見出していた律令官人の理解が窺われる。『万葉集』には、大伴旅人の「多都能馬も今も得てしか青丹よし奈良の都に行きて来むため」（巻五・八〇六）と、それに答えた某人の「多都乃麻を我は求めむ青丹よし奈良の都に来む人のため」（八〇七）に、「たつのま」の語が見え、仲谷健太郎氏[5]に拠れば瑞祥としての「竜馬」の和語化だとされる。『続日本紀』には「竜馬」の語は見えないが、瑞祥「神馬」の出現は大宝二年四月、天平三年十二月、天平十年正月、天平十一年三月などしばしば記され、そのうち天平三年詔には『符瑞図』に「神馬は河の精なり」、『孝経援神契』に「徳、山稜に至れば、神馬を出す」とあること、天平十一年詔にも『符瑞図』に「青馬にして白き髦と尾とあるは神馬なり。聖人政して資服制有れば、神馬出づ」、また「王者百姓を事とし、徳丘陵に至れば、神馬出づ」とあることも併せて記載されており、奈良朝期の律令官人が漢籍を通して瑞祥に関する知識を持っていたことが窺われる[6]。そして『延喜式』「治部省・祥瑞」には、「神馬」は

「大瑞」の品目の一つに掲げられ、「竜馬」はその一種だとされ、「竜馬、長頸、額上有翼、踏水不没」という説明が付されている。

追って述べるように下毛野虫麻呂は瑞祥思想について一定以上の知識を有していたことが確認できる。聖なる天子が立てば現われる瑞獣に「竜馬」がいることは当然知っていたはずである。「竜馬」の容姿の一つに「垂毛」があることも、『瑞応図』を参看すれば知り得たであろうし、たとえ『瑞応図』に接し得なくても、『芸文類聚』を引けば容易に得ることのできた知識である。祥瑞改元が通例となっていた奈良朝期の官人たちにとって、「垂毛」が、瑞獣「竜馬」の姿形を想起させる語であった可能性は決して否定できないだろう。

四、「飛鸞曲」―歌う瑞鳥「鸞」―

虫麻呂のこの詩の末尾「独有飛鸞曲　並入別離絃」には「鸞」が登場する。この「飛鸞曲」については、「別離に歌ふものならん。未だ出拠を検せず」（『新釈』）、「歌曲名ならんも未詳」（『杉本注』）などとされていたが、『林新註』が、王粲「蔡子篤に贈る詩」の「翼翼たり　飛鸞　載ち飛び　載ち東す」（『文選』）を典拠として指摘して「わかれのうた」だとし、『小島大系』が『山海経』の「鸞鳥自歌、鳳鳥自舞」（海外西経）を指摘して、「（鸞は）歌舞の鳥といわれ、飛鸞の曲はここに生れる、ただし特定の歌曲名ではない（鸞鳳と同じく君子の曲をも暗にさすか）」と注している。漢籍では「飛鸞」の語は、『芸文類聚』「舞」に引かれる梁・簡文帝「舞賦」の「断霞の照彩に似て　飛鸞の相及ぶがごとし」、『初学記』巻十五「舞」に引かれる辺譲「章華賦」の「忽ちに飄飄として以て軽游し　鸞の天漢に飛ぶに似る」、傅玄「却東西門行」の「退くこと潜竜の婉なるに似て　進むこと翔鸞の飛ぶがごとし」、張載韓「舞賦」の「軽裾は飛鸞たり　漂微は逾曳たり」など、歌い舞う様の美を譬喩する表現として用いられる。このことからも、鸞の飛翔が歌舞を連想させるものであったことが推察される。

しかし、漢籍において、鸞は無条件に現われ歌い舞うわけではない。「鸞」は、『説文解字』「鳥部」に、「神霊の精なり。赤色、五采、鶏形なり。鳴中に五音あり、頌声作せば則ち至る。…周成王の時、氐羌鸞鳥を献ず」とされ、五色に輝く赤い鶏形の身体を持ち、鳴き声は五音を兼ね備える霊鳥である。姿を現わすのは、皇帝の功徳と天下の泰平を言祝ぐ声や音楽が起こった時、すなわち理想の天子による秩序正しく和する太平の世が実現した時だという。

『山海経』には、「外なる世界」「非中国的異族の世界」

に生息する異形の動物として「鸞」がたびたび登場し、自ずから歌う姿が描かれる。⑦

A 西南三百里を女牀の山と曰ふ。其の陽に赤銅多く、其の陰に石涅多し。其の獣には虎・豹・犀・兕多し。鳥有り。其の状は翟の如くにして五采の文あり。名けて鸞鳥と曰ふ。見るれば則ち天下安寧なり。

（「西山経」67）

B 開明の西に鳳凰・鸞鳥有り。皆蛇を戴き蛇を践み、膺に赤蛇有り。

（「海内西経」587）

C 開明の北に視肉・珠樹・文玉樹・玗琪樹・不死樹有り。鳳凰・鸞鳥皆蔽を戴く。又離朱・木禾・柏樹・甘水・聖木・曼兌有り。

（「海内西経」588）

D 西北海の外、赤水の西に、先民の国有り。穀を食ひ、四鳥を使ふ。北狄の国有り。黄帝の孫を始均と曰ひ、始均北狄を生む。芒山有り、桂山有り、榣山有り。其の上に人有り。号して太子長琴と曰ふ。顓頊老童を生み、老童祝融を生み、祝融太子長琴を生む。是れ榣山に処り、始めて楽風を作る。五采の鳥有り。三名有り。一に皇鳥と曰ひ、一に鸞鳥と曰ひ、一に鳳鳥と曰ふ。

（「大荒西経」728）

E 東北海の外、大荒の中、河水の間、附禺の山に、帝顓頊と九嬪とを葬る。爰に…鸞鳥・皇鳥…有り。

（「大荒北経」753）

F 軒轅の国、此の窮山の際に在り。其の寿ならざる者も八百歳なり。女子の国の北に在り。人面蛇身、尾は首上に交はる。窮山其の北に在り。敢て西射せず。軒轅の丘を畏る。軒轅国の北に在り。其の丘は方にして、四蛇相繞る。此の諸夭の野は、鸞鳥自ら歌ひ、鳳鳥自ら舞ふ。a鳳皇の卵は民之を食ひ、甘露は民之を飲み、欲する所自ら従ふなり。百獣相ひ与に群居す。四蛇の北に在り。其の人両手に卵を操りて之を食ひ、両鳥前に居りて之を導く。

（「海外西経」511～513）

G 戟民の国有り。帝舜無淫を生み、戟に降りて処る。是れ巫戟の民と謂ふ。巫戟の民は肸姓、穀を食ひ、b績がず経らずして服するなり。稼せず穡せずして食ふなり。爰に歌舞の鳥有り、鸞鳥自ら歌ひ、鳳鳥自ら舞ふ。c爰に百獣の相群有り、爰処は百穀の聚る所なり。

（「大荒南経」703）

H 西に王母の山・壑山・海山有り。沃の国有り。沃民是れ沃の野に処り、鳳鳥の卵を是れ食ひ、甘露を是れ飲む。凡そ其の欲する所、其の味尽く存す。爰にd甘華・甘柤・白柳・視肉・三雖・璇瑰・瑤碧・白木・琅玕・白丹・青丹有り。銀・鉄多し。鸞鳳自ら歌ひ、鳳鳥自ら舞ふ。爰に百獣有りて相群す。是の処は是れ沃

の野と謂ふ。（「大荒西経」730）

I 西南、黒水の間に、都広の野有り。后稷は焉に葬る。爰にe膏菽・膏稲・膏黍・膏稷有り、百穀自ら生じ、冬夏に播琴す。鸞鳥自ら歌ひ、鳳鳥自ら舞ふ。f霊寿実華し、草木の聚る所なり。爰に百獣有り、相群れて爰に処る。此の草や、冬夏に死なず。（「海内経」793）

J 嬴民有り、鳥足なり。…神有り。人首蛇身、長は轅のごとし。左右に首有り。紫衣を衣、旃冠を冠る。名けて延維と曰ふ。人主得て之に饗食すれば、天下に伯たらん。鸞鳥の自ら歌ひ、鳳鳥の自ら舞ふ有り。鳳鳥の首文を徳と曰ひ、翼文を順と曰ひ、膺文を仁と曰ひ、背文を義と曰ふ。見るれば則ち天下和す。（「海内経」802）

Aは「女牀の山」に生息し、雉のような姿形で五色の文様を持ち、Bは蛇を戴き踏みつけ膺に抱き、Cは盾を抱き、DはAと同様に五色の文様を持つという。Dで楽風を初めて作った長琴の居住地に生息したとされるのは、音楽と関係深い鸞の性格を反映しているのだろうか。いずれにしても、異様な姿態であり、本当に出てきたら人間は恐怖して逃げ出すだろうが、Aに拠れば、鸞の出現は「天下安寧」の証だとされる。

F～Jでは共通して、「鸞鳥自ら歌ひ、鳳鳥自ら舞ふ」が描かれる。Fの「軒轅の国」では寿命が短い者でさえ八百歳まで生きるとされる。人智では測ることのできないスケールの時間である。人面蛇身で、尾が頭上で交差するという異形の住民は、人間世界を完全に脱した世界であることを象徴的に表している。そこに広がる「諸夭の野」は、「鸞鳥自ら歌ひ、鳳鳥自ら舞」ひ、「百獣」がみな共に生きているという。点線部aに拠れば、そこは、居住民が鳳凰の卵を食べ、甘露を飲み、欲する美味は全て食することができ、あらゆる獣が生息する場所であり、住民は両手で鳳凰の卵をとって食し、鸞と鳳が先導する、希望が叶う場所だとされている。Gの「裁民の国」というのは、点線部bとcに拠れば、縫製せずとも衣服があり、播種も収穫もせずして穀物が稔るという自ずからに満ち足りた国であり、あらゆる獣が生息しあらゆる穀物が集まっているという。Hの「沃の国」は郭璞注に「其の土饒沃なるを言ふなり」とされ、点線部dにはその肥沃な土壌に生み出される産物が列挙される。鳳鳥の卵を食い甘露を飲み、欲する食べ物は全て手に入るという沃民の生活ぶりはFと重なりあう。Iの流沙の西南、黒水の間に広がる「都広の野」も肥沃で生命力あふれる場所である。点線部eに列挙される農産物四種は、郭璞注「味好く、皆滑らかなること膏のごときを言ふ」に拠れば、美味で質のよい穀類であり、「播琴」は

郭璞注によれば「猶ほ播殖のごとし」ということであるから、あらゆる穀物が自然と生じて、季節を問わず繁殖するという。点線部fでは、霊寿が稔り、草木が群がって生え、あらゆる獣が生息し、この国の草は枯れることがないとされる。**J**には、君主が見つけると天下の覇者となるという「神」がいる。「延維」と呼ばれ、轅のような身の丈で、人首蛇身で左右に首を持つという。ここに「鸞鳥自ら歌ひ、鳳鳥自ら舞」ひ、この鳥が出現すると「天下和す」とされている。

このように『山海経』では、「鸞」は「外なる世界」に生息する異形の怪鳥であり、自然と穀類が生じ、欲しいものは何でも手に入り、何もしなくても満ち足りた生活を営むことができるという、現実世界ではあり得ない理想が実現した場所で自ら歌い舞い、その出現は天下太平の証だとされている。伊藤清司氏[8]は、この怪鳥を「天下安泰の吉祥とする思想は、のちに政治イデオロギーと結びついて、聖王出現の予兆とする理念的な瑞応思想に発展する」と言う。

『芸文類聚』「祥瑞部下」には「鸞」が挙げられ、これら『説文解字』『山海経』の他に次の資料が引かれる。

イ鸞鳥は鳳皇の佐なり。鳴中に五音ありて、粛粛雍雍たり。嘉すれば則ち鳴きて舞ひ、人君の行歩に容有り、進退に度有り、祭祀に礼有り、親疎に序有れば、則ち至る。一本に曰く、心に鐘律を識り、鐘律調へば則ち至り、至れば則ち鳴き舞ひ、以て和す。

（『孫氏瑞応図』）

ロ天枢得て、鸞鳥集ふ。（『春秋運斗枢』）

ハ天子官守賢を以て挙ぐれば、則ち鸞野に在り。（『春秋孔演図』）

ニ徳鳥獣に至れば、則ち鸞鳥舞ふ。（『孝経援神契』）

ホ徳充塞を化し、照八冥を潤せば、則ち鸞臻る。（『詩含神霧』）

ヘ黄帝鸞鳥来儀す。（『尚書中候』）

ト周公政を成王に帰し、太平にして礼を制し、鸞鳥見ゆ。（『尚書中候』）

チ宣帝后土を祀り、鸞鳳翺翔す。又た長楽宮東園園樹に集ふ。（『漢書』）

リ崑崙図に曰く、鸞鳥鳳に似て白纓なり。楽を聞けば則ち節を踏みて舞ひ、至れば則ち国安寧なり。（『抱朴子』）

ヌ王阜重泉令為り。鸞鳥学庁に集ひ止まる。阜は掾汝疊をして雅楽を張るを為さしむ。鳥は足を挙げ翼を垂らして、声に応じて舞ふ。縣庭に翺翔して、留まること十餘日、乃ち去る。（『東観漢記』）

ル鸞は女床に翔り、鳳は丹穴に出づ。拊翼して相ひ和し、

以て聖哲に応ず。石を撃ちて詠を靡かせ、韶音其れ絶たり。

（晋・郭璞「鸞鳥賛」）

「鸞」は、**イ**礼儀と秩序を重んじ、**ロ**この世の中心を担い、**ハ**賢人を登用し、**ニ**徳を鳥獣にももたらし、**ホ**この世界の果てまで徳を至らせ、**ト**礼を定め、**チ**祭祀を正しく行い、**リ**安寧の国を実現させ、**ヌ**雅楽を演奏させる、そのような理想の天子が現われ、秩序正しい調和が実現した理想の世の中が到来した時に現われて歌い舞う。**ル**は『山海経』の注者でもある郭璞の『山海経図讃』であり、女床山にいて、聖人哲人に呼応して出現し、美しく詠うという。これらを見ると、「鸞」を、聖人君主が現われると出現し、自ら歌い舞う瑞鳥だとする思想が確立していたことが分かる。

日本でも『延喜式』「治部省・祥瑞」に「鸞」が「大瑞」として挙げられ、「状は翟のごとく、五綵を以て文れり」と注記されている。奈良朝期までの史料に瑞祥「鸞」の出現を伝える資料は見出せない。しかし、『芸文類聚』を通して知識として蓄えることは可能であっただろうし、前節でも引いた通り、『続日本紀』に拠れば『符瑞図』や『孝経援神契』も既に舶来し、奈良朝期の律令官人がそれらを参看できたことは明らかである。『懐風藻』には、「鸞」が三例（52序、66、82）見られる。いずれも長屋王宅の宴会で詠じられた作品であることから考えると、漢籍に通暁し、先進的な表現をねらったであろう集団ゆえに共有された知識だったと推察される。特に、「使人は敦厚の栄命を承け、欣びて鳳鸞の儀を戴く」（山田三方52「秋日長王宅にて新羅客を宴す」序）と「趙を発す青鸞の舞　夏は踊らす赤鱗の魚」（箭集虫麻呂82「左僕射長王宅にて宴す」）からは、鸞が瑞鳥だという知識が共有されていたことが窺われる。

第四句「垂毛亦比肩」の「垂毛」は、『芸文類聚』の「祥瑞部」に挙げられる瑞獣「竜馬」の容姿を表す語として見出された。「飛鸞曲」の「鸞」も『芸文類聚』の「祥瑞部」に挙げられ、そこに掲げられた資料から理想の君主が立ち太平の世が到来すると出現して歌い舞う瑞鳥である。「垂毛」と「飛鸞曲」、いずれもが『芸文類聚』所載の瑞祥に関わる表現であるのは偶然の一致なのだろうか。下毛野虫麻呂による意図的な符合とは考えられないだろうか。

五、「比肩」
―王者の徳、幽隠・鰥寡に及べば則ち至る―

「比肩する」という語は汎用されるものであるため、従来の注釈がこの意に解してきたのは無理もない。しかし、『芸文類聚』「祥瑞部」には「比肩」という項目が祥瑞の名として立てられている。祥瑞の知識がある下毛野虫麻呂

がそれを知らなかったはずがない。そこには次の資料が掲出されている。

ヲ比肩獣は、王者の徳幽隠に及び、鰥寡所を得れば、則ち至る。（『瑞応図』）

ワ西方に比肩獣有り。邛邛岠虚と比ぶ。邛邛岠虚の為に甘草を齧り、即ち難有れば、邛邛岠虚負ひて走る。其の名を蟨と曰ふ。（『爾雅』）

カ北方に獣有り、名は蟨。鼠の前にして兎の後なり。（『呂氏春秋』）

ヨ蟨と岠虚とは、乍ち兎にして乍ち鼠なり。長短相ひ済ひ、彼我倶に挙ぐ。自ずから然るがごとく有りて、心を同じくして共に膂ふ。（郭璞「比肩獣賛」）

ヲに拠れば、「比肩獣」は、王の徳がこの世の見えない奥深くまで及び、身寄りのない者もその徳に浴することができた時に出現する瑞獣である。**ワ**では、比肩獣は蟨と呼ばれ、邛邛岠虚と並び、邛邛岠虚のために甘草を齧ってやり、緊急事態に際しては邛邛岠虚が蟨を背負って走るとされる。**カ**からは蟨の前足は鼠ほどの短さで、後ろ足が兎ほどの長さを持つことが分かる。つまり、前足の短い蟨は地面に生える甘草は食べられるが、後ろ足が長すぎてバランスが悪いため早く走ることができない。その蟨の短所を補っているのが邛邛岠虚である。緊急事態には蟨を背負って走る。その代わりに、蟨は邛邛岠虚に甘草を齧ってやる。**ヨ**郭璞「比肩獣賛」は、そのような互いの不足を補い合って常に助け合いながら生きる蟨と邛邛岠虚を讃美する。**ヲ**～**カ**では蟨が比肩獣と理解されているようだが、郭璞は蟨と邛邛岠虚をまとめて比肩獣と認識しているように見える。何と何を比肩獣とするかには若干の相違が見られるが、お互いに補い合って生きる異形の珍獣だという認識は共通しており、世界の隅々まで王の徳が浸透した時に現れるとされていたことが窺われる。『宋書』「志・符瑞中・獣」にも「王者の徳矜寡に及べば、則ち至る」とある。[9]

邛邛岠虚と蟨の名は、他の漢籍にも現われる。

『山海経』「海外北経」538には、「北海の内に…素獣有り。状は馬のごとし。名けて蛩蛩と曰ふ。一たび走れば百里」とあり、並外れて走る力を持つ、馬のような形をした奇獣として蛩蛩が記される。東晋・郭璞は「即ち蛩蛩鉅虚なり。一たび走れば百里。『僕天子伝』に見ゆ。音は邛。」と注している。『僕天子伝』とは「邛邛距虚百里を走る」（巻一）を指すと見られる。『山海経』に「比肩獣」の語はないが、『箋註』の「山海経に比肩獣有り」はこの「蛩蛩」の記述を指すのだろう。[10]その他にも、『淮南子』「道応訓」に「北

方に獣有り、其の名を蹶と曰ふ。鼠の前にして兔の後なり。趨れば則ち頓び、走れば則ち顛ぶ。常に蛩蛩駏驉の為に甘草を取りて以て之に與ふ。蹶患害あれば、蛩蛩駏驉必ず負ひて走る。此れ其の能ふを以て、其の能はざる所を托すなり」、『韓詩外伝』巻五に「西方獣有り。名を蟨と曰ふ。前足は鼠にして後足は兎なり。甘草を得れば必ず銜み、以て蛩蛩距虛に遺る。其の性蛩蛩距虛に能きに非ず、為に之に仮らんとする故なり」、『説苑』「復恩」の「北方に獣有り、其の名を蟨と曰ふ。前足は鼠にして、後足は兎なり。是の獣や、甚しきかな、其れ蛩蛩巨虛を愛するなり。食に甘草を得れば、必ず齧り以て蛩蛩巨虛に遺す。蛩蛩巨虛は人の将に来らんとするを見れば、必ず蟨を負ひて以て走る。蟨は性、蛩蛩巨虛を愛するに非ず、其の足を仮らんが為なり。二獣者も亦た性質、蟨を愛するに非ず、其の甘草を得て之を遺すが為の故なり」など、蛩蛩岠虛と蟨が、能力の不足を補い合って生きる奇獣として取り上げられている。『説苑』では、「二獣」としているから、「蛩蛩」と「巨虛」を別々の獣と認識しているようである。

詩賦では、司馬相如「子虛賦」（『文選』）で「蛩蛩を蹴り、距虛を轔ぐ」というように、走るのが頗る速い珍獣として登場し、同じく「上林賦」には麒麟などとともに上林苑に生息する奇獣として列挙される。阮籍「詠懐詩 其の十四」（『文選』）の「周周は尚ほ羽を銜み　蛩蛩も亦た飢ゑを念ふ」や、楊方「合歓詩 其の二」（『玉台新詠』）の「暑には比翼扇を揺らし　寒には併肩氈に坐す…彼の蛩蛩獣と斉しく　挙動相捐てず」の「併肩」は「比肩」の言い換えであり、一緒に行動する「蛩蛩獣」を指す。嵇含「伉儷詩」（『芸文類聚』巻四十「礼部・婚」）の「夏は比翼扇を揺らし、冬は蛩蛩氈に臥す」という類似の句があり、この「蛩蛩の氈」は「併肩氈」を言い換えたものと見られる。

漢籍において、蛩蛩距虛と蟨に対する具体的な理解には若干の揺れや混同があるように感じられる。が、蛩蛩距虛が非現実的な距離を走る駿馬で、奇妙な体型のために走ることができない蟨を背負って走り、その代わりに蟨から食物をもらうという、生きていくためにはお互いがお互いを必要とする「比肩獣」として認識されていたことは間違いない。蛩蛩が『山海経』に記載されることから、恐らくはもともとは千里を走るという特殊能力を有する異世界の奇獣として観念されていたのだろうと思われる。その特殊性によって超自然の力を持つ神秘的な表象となり、瑞祥思想に取り込まれて、『瑞応図』などに網羅されることになったのだろう。

『延喜式』「治部省・祥瑞」の「大瑞」にも「比肩獣」が挙げられ、「前足は鼠にして、後足は兎なり。比ばされ

ば行かず」と説明されている。従って祥瑞としての「比肩獣」の存在は古代日本においても受容されており、官人たちの知るところであったと考えられる。

六、「垂毛」で「比肩」の「梯山客」

「垂毛」が有徳の王者が出現すると現れる瑞獣の竜馬の特徴を表す語であり、末句「飛鸞」の「鸞」もまた聖なる天子のもとで天下泰平が実現すると歌う瑞鳥であるとすれば、「比肩」もまた、瑞獣「比肩獣」を指すと解するのが最も合理的な理解となるのではないだろうか。

下毛野虫麻呂詩の冒頭「□時逢七百　祚運啓一千」は、最初の一文字目が欠落しており、はっきりしない。[11]が、諸注が指摘するように、周の成王の卜に七百年続く御代になることが現れたという故事（『春秋左氏伝』宣公三年）を用いて、七百年続く一千年に一度の聖代にめぐりあった幸いを述べていると解される。それに続くのが「況乃梯山客垂毛亦比肩」である。「況乃」は、「況乃」に後接される事柄の程度が、「況乃」に前接される事柄の程度に匹敵することを表す。「兼豆未能飽、重裘距解寒、況乃冬之夜、霜気有餘酸」（邢子才「酬魏収冬夜直史館」『初学記』「歳時部・冬」）であれば、「兼豆」「重裘」でも解消されないひもじさや寒さと比べることで、「冬の夜」の「霜気」のもたらすつらさがそれに匹敵するものであることを表し、「陰崖常結晦、宿莽競含秋、況乃霜晨早、寒風入戍楼」（駱賓王「至分水戍」[12]）であれば、「寒風が戍楼に入る霜の早朝」に現れる季節の厳しさが、「陰厳」「宿莽」に匹敵することを表す。下毛野虫麻呂のこの詩の場合、「況乃」の前に置かれるのは、七百年続くとトされた聖代、一千年に一度と言われる聖代が現れた幸いを述べる二句である。この二句で表されるのは、その聖代に巡り合うことの稀少性と偶然性である。言い換えると、そのような聖なる時代が実現した奇跡である。そうすると、「況乃」に接続する「梯山客　垂毛亦比肩」には、それに匹敵する奇跡、すなわち稀少性と偶然性を持つ事柄が示されていなければならない。ざんばら髪となった列席者が寛いで親密に宴を楽しむことや、白髪の使者が交じることが、一千年に一度しかない七百年の永続が約束された聖代の到来に匹敵する奇跡として「況乃」で導き出されているとは考えにくい。

「梯山客」は従来、新羅使を指す語として解されてきた。「梯山」は、杉本注が指摘する「航海梯山、奉白環之使」（梁簡文帝「大法頌」）のように、「航海」と組み合わされて道中の苦難をいう表現となる。漢籍には、この簡文帝の頌と同じく、「航海梯山之客、奉贄輪琛」（李嶠「上応天神龍皇帝冊文」）、「梯山航海、交臂屈膝」（梁元帝「職貢図

序」『芸文類聚』巻五十五「集序」）、「梯山咸入款、駕海亦来思」（唐太宗「幸武功慶善宮」）など、朝貢使の来朝を表す例が散見される。従って、「梯山客」を日本に来朝した新羅客を指すと解することに問題はないように見える。しかし、新羅と日本を隔てるものとしてまず想起されるのは、山ではなく海ではないか。神功皇后の新羅遠征も越海が描かれるし、他の長王宅新羅客送別宴詩における「莫謂蒼波隔、長為壮思篇」（長屋王68「於宝宅宴新羅客」）、「江海波潮静、披霧豈難期」（調古麻呂62「初秋於長王宅宴新羅客」）、「青海千里外、白雲一相思」（百済和麻呂77「秋日於長王宅宴新羅客」）からは、両国を隔てているものは海だという認識があったことが確認できる。このように新羅客は「海を越えてやって来る客」だという認識されていたのに、「航海梯山」という定型句のうちわざわざ「航海」を省いて、「梯山」の方を選択し、新羅客を「山に梯をかけてやって来た客」だとするのはかなり不自然ではないだろうか。とすれば、下毛野虫麻呂詩では、「梯山客」という語が新羅使を直接的に指すことを意図していなかった可能性が考えられる。

新羅客が「海を超えて」来朝することは当たり前であり、宴席で交流を温めるのもいつものことである。それはめでたいことではあるが、七百年永続する聖代との、一千年に一度の巡り合わせに匹敵するほどの稀少性を持つような偶事ではない。だから、新羅使を「航海の客」と表現しても、奇瑞性の表明にはならない。「梯山の客」が新羅使にふさわしい表現ではないからこそ、それは奇瑞なのであり、したがって「梯山の客」は新羅使ではない者の来朝を指していると見るべきである。漢籍では、木犀は「巖客」と、雁は「客雁」と、蟋蟀は「客虫」、虎は「寅客」と、仙人は「羽客」や「馭風之客」とそれぞれ呼ばれるなど、鳥獣や生身の人間ではない存在に対しても「客」は用いられる。このことから見ても、「梯山客」が生身の人間を指すとは限らず、新羅使だと決めつけることはできないだろう。

「垂毛」は有徳の王が出現した時に現れる神馬の特徴であり、体毛を長く垂らしていることであった。「比肩」は王の徳がこの世の隅々まで行き渡った時に現れる比肩獣を意味し、お互いに補い合うために常に肩を並べる格好をしていることであった。「梯山客、垂毛亦比肩」、すなわち「山に梯をかけて出てきた客が、垂毛して比肩である」とは、山の奥から、異形の瑞獣が出てきたということを言っているのではないだろうか。「□時逢七百　祚運啓一千　況乃梯山客　垂毛亦比肩」という冒頭四句は、そのような瑞獣が出現したことの稀少性と偶然性が、聖代の出現の奇跡に相応することだと言いたかったのではないかと推察さ

れる。

「垂毛」する神馬・竜馬は文字通り「馬」を連想させ、『芸文類聚』では「祥瑞部」の「馬」に分類される。千里を走り、かつ「状は馬のごとし」（『山海経』「海外北経」）とされる「比肩獣」も「馬」を連想させる。竜馬と比肩獣が有するこのイメージには、海を渡って来たとするより、山を越えて来たと表現する方が似つかわしい。そのため、「航海梯山」の定型句のうち、「航海」ではなく「梯山」が選択されたのだろう。

「況んや乃ち梯山の客、垂毛にして亦比肩なり」は、聖代の出現に巡りあった日本に、「垂毛」の瑞獣である竜馬と、お互いを補い合う瑞獣の比肩獣とが、山の向こうの異世界から来訪したことを言っていると解される。今、日本には、七百年続くという神意を受けた聖なる御代が出現している。これは一千年に一度の僥倖である。竜馬や比肩獣が山の向こうからやって来るのは、まさにそれに相応する瑞兆だと述べているのだと考えられる。

七、新羅と「馬」

『日本書紀』神功皇后摂政四十七年夏四月条の百済・新羅の朝貢記事では、両国の貢物を検校し、新羅の貢物に「珍異」なものが「甚だ多い」のに対して、百済の貢物が「少なくて賤しい」理由を問いただす場面がある。百済使の弁明と日本側の裏取り調査とによって、新羅人が百済の貢物を強奪し、新羅の貢物と取り替えてしまったためであったことが判明するのだが、この記事からは、朝鮮からの使節には珍しい物の舶来が求められ、その質が査定されたことが窺われる。[13]

神功皇后の新羅遠征では、新羅王は降伏にあたって、「今より以後、長く乾坤と与に伏して、飼部と為らむ」と言い、常に貢物を怠らず、春秋には「馬梳」と「馬鞭」とを献上することを誓ったとされる（神功皇后摂政前紀仲哀天皇九年冬十月三日）。『新編日本古典文学全集 日本書紀』は、「朝鮮諸国から馬・馬具・馬丁ほか飼育法の輸入と新羅征討を結合したために生じた」記事ではないかと注している。後に応神十五年秋八月六日には百済から「良馬二匹」が献上されたという記事も見られ、馬の輸入が朝鮮半島と強く結びついていたことが窺われる。

『日本書紀』『続日本紀』には、新羅から日本へ「馬」「騾馬」が献上された記事が散見される。「騾馬」は、『和名抄』「牛馬類」に「騾、説文云、驢父馬母所生也」とあり、『新大系 続日本紀二』補注8—35に拠ると、「牡ろばと牝馬とを交配させてできる雑種で、通常繁殖不能。馬より小型でろばに近似するが、粗食にたえ耐久力があり、労

役に適している。ろばやらばは中国・朝鮮には多いが、日本にはいないため珍重されたらしい」という。天武八年十月十七日条に「馬」「騾」、天武十四年五月二十六日条に「馬二匹」、朱鳥元年四月十九日に「細馬一匹」「騾一頭」、持統二年二月二日条に「馬」、養老三年閏七月七日条に「騾馬牡牝各一疋」、少し後になるが天平四年二月十九日条に「騾二頭」がそれぞれ新羅使から献上されたとする記事が見える。霊亀二年（七一六）六月二十七日条には、馬史伊麻呂という官人が体長「五尺五寸」の「新羅国の紫驃馬二疋」を献上した記事がある。『新大系 続日本紀二』脚注に「紫驃馬」は、「紫色にみえる地に白の斑点のある駿馬か」とされ、「五尺五寸」という体長は、出土する馬骨に比べると「はるかに大きい」とされる。これに拠れば献上されたこの新羅の馬は、体格のよい駿馬だと推定される。これらの記事からは、朝鮮半島とりわけ新羅が珍異な馬をもたらす国として認識されていたことが窺える。

こうした認識が、新羅使の朝貢に伴う竜馬や比肩獣の出現という観念的世界を生み出したのではないだろうか。ひょっとしたら、下毛野虫麻呂が応接した今般の新羅使も、馬あるいは騾馬を貢物として連れてきたのかもしれない。長王宅で宴席が張られた時の新羅使来朝は、養老三年、養老七年、神亀三年時のいずれも可能性がある。[14] 養老三年は「騾馬」の献上が記録されており、養老七年と神亀三年については貢物の記録がなされていないが、馬や騾馬が貢上されている可能性はある。伝統的に新羅使が馬や騾馬といった珍獣を貢上したことが、竜馬や比肩獣の出現を連想させたのではないか。珍しい動物を連れてくる国という新羅に対するイメージが「垂毛亦比肩」という表現を生み出すことになったと推察される。

八、おわりに

『経国集』には、下毛野虫麻呂の和銅四年三月五日付対策文が収録されている。下毛野虫麻呂はそこでも「銜禾之獣屡臻、見穰之鱗荐集」というように、瑞祥を使って聖朝の到来を述べている。そのような知識を身につけていた下毛野虫麻呂は、新羅使をゲストに迎えての送別宴で創作するにあたり、瑞祥を用いることを思いついたのだろう。新羅使が珍しい馬を貢上することは恒例化しており、その連想から虫麻呂は山を越えてはるばる我が国に瑞獣の馬がやって来たと表現したのではないか。祥瑞をもたらしたと述べることによって、滅多には現れない貴宝をもたらす国の使者として新羅使を高く評価することになり、同時に日本の天皇をも聖帝として讃美したことにもなる。瑞獣の出現は、普通では現れない聖帝の即位という奇跡が実現して

いることの証だからである。下毛野虫麻呂の意図は、祥瑞出現を通して新羅の使者と日本の天皇を同時に讃美することにあったのではないかと推察される。

注

（1）この作品には詩序が付されているが、複数の『懐風藻』伝本において、詩と詩序とが区別されずにつなげて書写されており、詩序と詩の分かれ目が分からなくなっている。そのため、詩序と詩の分かれ目をどのように判読するかによって、詩序末尾と詩冒頭の本文に異同が生じることとなった。本稿で空欄にしている冒頭一字については、群書類従『懐風藻』に依拠して「聖」字が採用されることが多い。しかし、「聖」字は林家で校訂された本文を伝える塩竈本（天和三年書写）の文字である。塩竈本を対校本に用いた屋代弘賢校本にその塩竈本の「聖」字が書入として書き取られ、屋代弘賢校本を用いて編纂された群書類従『懐風藻』においてその書入が正文として採用された。林家系統以外の伝本の本文には現れない文字であることから考えても、江戸初期に林家で案出された文字である可能性が極めて高いと考えられる。本当に成立当初の『懐風藻』本文であったかどうかを検討する必要があるだろう。「聖」字のほかには、「出」字（脇坂本・鍋島本・慈渓本・版本など）、「歳」字（尾州本・松平本・榊原本）があるが、詩序末尾の本文ともあわせて検討し直す必要があると思われる。詳しくは、拙著『校本懐風藻』（新典社、二〇〇二年）参照。

（2）小島憲之氏は『上代日本文学と中国文学 下』（塙書房、一九六五年）においても、「『垂毛』云々は、楊炯、庭菊賦『及レ暮二年華一、髪垂レ肩』の如く、新羅客が来朝して以来月を経たの意か、未詳。或は、白い頭髪を垂らした新羅の客も我々と肩を並べてこの宴に侍るの意か、後考をまつ」（一三〇四頁）と述べている。

（3）この『太平広記』所収『王子年拾遺記』の「韓稚」における「垂毛」については、頼衍宏「一九六〇年代『和習研究』追考―コーパスに基づく再検討―」（国際日本文化研究センター『日本研究』五十一集、二〇一五年三月）に指摘されている。頼氏は、「垂毛」の語を小島憲之氏の「毛髪を垂らした」に賛意を示した上で、韓稚の説話が清・陳夢雷編『古今図書集成』の「方輿彙編辺裔典」に収録されていることなどから、「日本の方向からやってきた外交使節が中国の冊封体制に組み込まれる一つの古典説話として知れ渡っていた」と推測し、下毛野虫麻呂詩の「垂毛」は、「千年前の漢の恵帝の治世中国に朝貢外交をしにきた東夷方面の使者の中に『垂毛』がいたのに対し、千年後の日本はもはや〈中国〉への脱皮を果たしてなおかつ太平の世をつくりだしたため『夷』（外国）である新羅の『垂毛』の異人が千年ぶりに集いにきた」ことを言い、「新羅の使者を褒め称えながら、漢王朝の中国に匹敵すべき、奈良王朝の〈中国〉をも讃美している」表現だと論じている。しかし、韓稚の「垂毛」は、「腰より已下は垂毛有りて自ら蔽ふ」というのであるから、腰から下に生える体毛が垂れて下半身を覆っている状態と解するべきだろう。また、韓稚説話が外交史料として認識されるのは後代のことと見られる。古代の志怪小説集に収録された韓稚説話を後代に成立した認識で捉えるのは問題であろう。

（4）『宋書』「符瑞志」については、平秀道「宋書符瑞志について」（『龍谷大学仏教文化研究所紀要』十五集、一九七六年六月）参照。平氏に拠ると、竜馬の出現は晋以前に三回記されるという。その他、祥瑞については、東野治之「飛鳥奈良朝の祥瑞災異思想」（『日本歴史』二五九号、一九六九年十二月）、東野治之「豊旗雲と祥瑞」（『遣唐使と正倉院』岩波書店、一九九二年）、福原栄太郎「祥瑞考」（『ヒストリア』六十五号、一九七四年）、平秀道「日本書紀と讖緯思想―大化の改新前後の記載を中心として―」（『国文学論叢』七輯、一九六〇年一月）、平秀道「日本書紀と讖緯思想（続）―天武紀の記載を中心として―」（『国文学論叢』九輯、一九六二年九月）、平秀道「続日本紀と讖緯思想」（『龍谷大学論集』三七七号、一九六四年九月）、柄浩司「六国史の祥瑞記事について」（『中央史学』十号、一九八七年三月）、安居香山『緯書と中国の神秘思想』（平河出版社、一九八八年）、江畑武「皇極紀三年条の瑞祥記事について―中国に於ける禅譲の歴史より見て―」（『日本書紀研究』二十冊、一九九六年十月）、水口幹記「『天地祥瑞志』の基礎的考察」（『日本古代漢籍受容の史的研究』汲古書院、二〇〇五年）小塩慶「古代日本における唐風化政策と祥瑞思想の受容」（『史林』九十九巻二号、二〇一六年三月）などに裨益された。

（5）仲谷健太郎「『たつのま』をめぐって」（『美夫君志』一〇二号、二〇二一年四月）。

（6）前掲注（4）東野治之氏の論文「飛鳥奈良朝の祥瑞災異思想」に拠れば、養老年間には祥瑞に関係する制度の一応の完備を見るとされる。

（7）伊藤清司氏は『中国の神獣・悪鬼たち―山海経の世界―』（東方書店、一九八六年）において、中国の古代社会に生きる人々の生活が営まれる「内なる世界」の外側に広がる「野獣や禽獣が跳梁し、蝮蛇が横行するおそろしい『野生の空間』」を「外なる世界」と呼び、『山海経』は「外なる世界」を描く「山経」と、中国世界の外側にひろがる「非中国的異族の世界」を描く「海経」とで構成されるとしている。『山海経』については、伊藤氏の同書の他、前野直彬『全釈漢文大系 第三十三巻 山海経・列仙伝』（集英社、一九七五年）、松田稔『『山海経』の基礎的研究』（笠間書院、一九九五年）、松浦文子『漢魏六朝における『山海経』の受容とその展開―神話の時空と文学・図像―』（汲古書院、二〇一二年）などに裨益された。尚、本稿における『山海経』の引用文の番号は前野氏の『全釈漢文大系』に基づいており、訓読も前野氏の訓読を参照した。Hの「鸞鳥」は、郭璞注『山海経』では「鸞鳳」となっているが、前野氏全釈大系に、清・畢沅『山海経新校正』では、「鸞鳥」に作っているとされ、「そのほうが下とうまく対応する」（五五四頁）と注される。本稿は「鸞鳥」とした。

（8）前掲注（7）伊藤清司氏書、二一四頁。

（9）前掲注（4）平秀道氏の論文「宋書符瑞志について」に拠ると、「比肩獣」の名称と説明はあるが、出現の実例は記載されていないという。なお、林巳奈夫『漢代の神神』（臨川書店、一九八九年）に、獣帯鏡に比肩獣が表され、その銘文に「…刻画奇守成文章、距虚辟邪除群凶、師子天禄会是中…」とあり、「距虚」が「奇守（獣）」と呼ばれている例や、武氏祠の屋根石に瑞祥図が描かれており、その中に比肩獣が確認され、傍題に「比肩獣、王者徳及鰥寡則至」とある例が

紹介されている。松本榮一「敦煌本瑞応図巻」（『美術研究』一八四号、一九五六年三月）、菅野恵美「墓葬装飾における祥瑞図の展開」（『東洋文化研究』十号、二〇〇八年3月）にも、武氏祠の瑞祥図や和林格爾墓壁画に比肩獣が刻まれていることが指摘されている。

（10）拙著『静嘉堂文庫蔵『懐風藻箋註』本文と研究』（汲古書院、二〇一八年）では、『山海経』に「比肩獣」の語がないことから、今井舎人（鈴木真年）が『爾雅』の「比肩獣」を引く黄省曾『獣経』あるいは『獣経』を引く呉任臣『山海経広注』の注文と、『山海経』とを混同したかと述べたが、今井舎人は混同したのではなく、『山海経』の「蛩蛩」が他書で「比肩獣」とされる生き物を指すと認識して注したものと思われる。

（11）前掲注（1）参照。

（12）小島憲之氏が前掲注（2）書一三〇四頁で、「況乃」について、「況」を強める助字として、駱賓王のこの箇所を例に挙げている。

（13）新羅からの動物の献上を考察した論に、渡辺一紀「7世紀後半における新羅使の動物献上―天智天皇10年と天武天皇8年を中心に―」（『大手前比較文化学会会報』十三号、二〇一二年三月）がある。渡辺氏は、「日本には生息しない動物を献上することで、新羅と日本との関係を強化しよう」という意図が新羅にあったのではないかと述べている。

（14）『懐風藻』所収の長王宅での新羅使宴詩は十首あり、それらがどの新羅使来朝時のものかについては様々な論が出されているが、まだ統一した見解が出されるには至っていない。この下毛野虫麻呂詩についても、神亀三年がふさわしいが養老七年の場合もあるとする小島憲之氏前掲注（2）書（一二八五頁）、養老七年とする鈴木靖民『古代対外関係史の研究』（吉川弘文館、一九八五年、一五四～一五六頁）や井実充史「『於長王宅宴新羅客』詩の論」（『上代文学』七十三号、平六年十一月）、神亀三年とする村田正博「上代の詩苑―長王宅における新羅使饗応の宴―」（『大阪市立大学文学部紀要人文研究 国語国文学』三十六巻八分冊、一九八四年）などがあり、定見には至っていない。

附記　本稿は、科研費基盤研究C（課題番号19K00342）の助成を受けて行った研究の成果の一部である。